

「うまい英語で医学論文を書くコツ」

A guide to comfortable English

浜松医科大学教授 植村研一 著

植村研一教授著「うまい英語で医学論文を書くコツ」を読んだ。いつもの氏の軽妙な語り口で、一気に読ませられた感じである。氏の40年以上にわたる英語歴の重みが各頁に満ちている。

うまい英語、気持ちのいい英文 comfortable English の条件として、論点が簡潔かつ明快に述べられていることが重要である。氏の英文誌編集や英文校正の長年の経験をもとに、米英人に通じる英文の特徴や内容が、詳細に述べられている。

その中の要点を取り上げてみる。

①日本語の医学用語には動詞がない。名詞に「する」を付けて動詞化しているのが日本語であるが、英語の動詞に習熟することが必要である。②受動態と能動態をうまく使い分ける。by を使ってまで行為者を言う必要があるなら、最初から能動態を使う。著者自身の originality を主張するときは、著者を主語とする能動態を使う。意見を発表する場

で受動態を使うのは大きな誤りである (Robbins 氏)。③できるだけ be 動詞を避ける (動詞全体の 1/3~1/4 にとどめるべきである)。④ of の反復はできるだけ避ける。⑤冠詞の使い方—これはどの本でも悩みの種である。ある程度、法則的なものはある。冠詞を使っても使わなくてもよい時には、全体的に、英国人は必ず付けるが、米国人はなるべく省く傾向がある。⑥ by と with の使い分け。⑦米国の医師はできるだけラテン語を避ける傾向にあり、epigastria などあまり用いない。⑧ case と patient の使い方。⑨ may, can, would, could などを使わず、現在形でストレートに表現する方が、科学論文では普通。⑩“～の立場・視点から”という表現は、英語ではあまり使われない。⑪neurological, physiological などに対する neurologic, physiologic などの短縮形は品位を下げる可能性があるもので、日本人は避ける。⑫要約

(summary) と抄録 (abstract) との違いをわきまえる。要約は論文の一部であり、本文と切り離して出版する意図はない。しかし、抄録は出版される論文の中に含まれ、通常はすぐ目に入るように論文の初めに置かれているが、論文とは別に出版されることが意図されている。⑬日本では論文の書き方は勿論、人前での発表の仕方 (public speech) というのはどこでも教育されていない。いかに話すか (how to make speech) も、全く日本の教育システムには含まれていない。アメリカの高校では“public speech”か“drama”が必須になっている、等々。

以上のような趣旨の下に、基礎編、添削例の総合的解析 (100 題)、原文と訂正文の対比 (100 例)、Robbins 氏との対談などが書かれている。私にも苦い経験があるが、訂正文を読んで、リズムカルでわかりやすいことに感心した。私たちの英語力の盲点を親切に、かつ辛らつに解きほぐした名著として推薦する次第である。植村教授には、ぜひこの続編を書いていただくことを期待する。

(住友病院院長・京都大学名誉教授)
亀山 正邦

●A5 236 頁 1991 年

定価 2,987 円 (税込) 送料 300 円

医学書院 刊 (☎ 03-3817-5657)